
本田菊と申します。

さくら。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本田菊と申します。

【Nコード】

N8587J

【作者名】

さくら。

【あらすじ】

あることが切っ掛けで菊はなんと女性に……………っ!?

のほほんとした生活の中にいろいろなことが混じります。とにかく、読んでみてください

ちなみに人名表記です。人名が出てない人はあんまり出しませんのでご了承を。………というか、すみません。

この物語は実際の国や軍事などには全く関係ありません^^
あ！それと、この小説ではだいたい皆菊が大好きだったり好きです
ので、

その辺を踏まえてお読みくださいませ！

ただの日常（前書き）

えっと、文才のない私ですが、なんとなく書いてみたくて書いてみました↑

楽しんでもらえたらなー、と思います。

この小説は女体化を含みますので、苦手な方はお戻りくださいませ。

あと、キャラは国名でなく名前で書かせていただきます！
もし名前が解らない方は

ヘタリア 名前

で検索すれば、出てきます。お手数をおかけしてすみません！

それでは本編スタートです

ただの日常

朝、目覚めた。

「ふう、良い朝ですねえ……………」

私は独り言を呟いて、朝の準備に取り掛かりました。

顔を洗い、洋服を着て、朝ごはんを食べて、歯磨きをする。
何の変哲もない日常です。

「あ、今日は世界会議の日でしたね……………」

騒ぐだけ騒いで、結局何も決まらないような傍から見れば駄目駄目な会議。

だけど、とっても楽しい気持ちになります。

私も皆さんの仲間になれたような、そんな気がして……………」

「あ、もうこんな時間です！！急がなくては！」

感傷に浸っている内に、家を出る時間になっており、私は会議の会場に向かいました。

ただの日常（後書き）

これから菊が………！！

次回をお楽しみにっ♪

世界会議（前書き）

いきなりですけど、フェリクスとトリスって女の子みたいに仲良くて可愛くないですかー？（マジいきなりだな！？

まあそれはさておき、

さて、第二話です お楽しみください♪

世界会議

「ふう……。取り合えず、間に合って良かったです……。」

会場に着いたのは、会議の始まる5分前。

私はそろりそろりとドアを開けて中へと入って行きました。すると入るなり、

「ヴェーー!! 菊!! 遅かったね! どうしたの? 皆心配してたんだよー??」

とフェリシアーノ君が駆け寄ってきて、ハグを求めてきました。

もう、だから私、ハグとかまだ慣れてないって言っているのに……

! と思っていたら、

「おい、フェリシアーノ。菊も今来たばかりなんだ。少しくらい休ませてやれ。」

とルートさんが助けて下さいました。感謝感謝です。

するとルートさんが、

「しかし、今日はどうしたんだ? いつもなら会議の始まる30分前には来ているのに……。何かあったのか?」

と尋ねてこられたので、私は、

「いえ、ただ、少し感傷に浸っていただけですよ……。」

と微笑みながらありのままをお伝えしました。

ルートさんも、

「そうか。ならいいんだ。」

と目を細めて言葉を返して下さいました。

「よし! 菊も来て皆揃ったところだし、世界会議を始めるぞー!」

そんなアルフレッドさんの一言で、皆さんがだらだらと

(アルフレッドさんは「もー、君たち、もっとシャキツとしなきゃ駄目じゃないかー!!」

と駄目出しをされていましたが、)

席に着き、会議が始まりました。

会議と言ってもアーサーさんやフランスさんが喧嘩したり、イヴアンさんが恐ろしいことを言って、バルト3国の方々を困らせたり……。

いつも通りの時間。でも、私にはそんな時がとても愛おしく感じられたんです。

それが顔に出ていたのでしょうか。

「おーい、菊！何笑っているんだい？」

とハンバーガーをシェイクで流し込んで食べ終わったアルフレッドさんが大声で私に問いかけてきました。

その叫び声とも言える大声に皆さんが気付かない訳も無く、同時にパツと私のほうを向きました。恐ろしいほどのシンクロ具合ですね……。

「本当ある！菊が笑ってるあるーっ！！」
と王さん。

「うわ、マジで笑ってるしー！てかさー、俺、菊が心から笑ってる
とこ見るの初めてなんですけどー。」

とフェリクスさん。その言葉に皆さんは俺も、私も、僕も、などと賛同の声を挙げました。

「え……。私、笑ってましたか……？」
自分では笑っているつもりなど無かったのだけれど……。

「はい、ばつちり笑ってましたよ？なんとも“可愛い”笑顔でしたよ。」

とエリザさんが言いました。

その瞬間、さっきまで騒がしかったのが嘘のように場内がしーんと静まり返りました。

「あら？わたし、何か変なこと言った？」

とエリザさんはまわりの方々に面白そうに問いかけました。

すると、その問いかけでいち早く沈黙から立ち直ったバツシュさん

が、

「み、皆！！今日はもう解散なのである！！各自家に帰るようにつ
！！」

と叫び、今日の会議は終了しました。

そういえばバツシュさん、叫んだ時顔が赤くなつてませんでしたか
ねー？

会議が終わって、他の方々に話しかけても皆さん顔を赤くされて、
よそよそしい態度でしたし……。やはり先程の沈黙に関係あるので
しょうか……？

うーん、やはり世界の事情は複雑怪奇です……。

私はいろいろと考えを巡らせながら、帰宅し、やがて眠りにつきま
した……。

世界会議（後書き）

にひひひひ（何っ！？

沈黙の意味はなんだっ たんでしょうねー！！

次回に明かされます♪

こうご期待！！

星に願いを……………（前書き）

あはは、うつの大変ぞーだな（おい

星に願いを……

さて、先ほどの沈黙……。あれにはこんな意味があった。
あのエリザの言葉。そう、“可愛い”。
この言葉に対し、その場にいた全男性陣全員（一部、純粹に可愛い
と思っただけの人が居たが、）がこのように考えた……。

菊の笑顔

← “可愛い”！？

← いや、うん、可愛くないと言っちゃ嘘になる……………。

← それで、菊の笑顔が“可愛い”ってことはその笑顔を発している菊
自身も“可愛い”ってことで……………。

← つて、何考えてんだ！！菊は男だろっ！？

← いや、待てよ。逆に女だったら全然問題なしになるじゃないかっ！

！

← 菊が……………女か……………。（想像中）

← 可愛いじゃねえか、この野郎！！／／／／／

と、言う訳だ。

それではこの沈黙事件があつた世界会議の、帰ってからの男性陣の

様子を一部ご紹介しよう……。

W v e r s i o n

ふう、今日の会議は疲れたある……。

特にあの沈黙が………っ！！またあの時のことを思い出しまつたあるよ……。

「全く、我は何を考えているあるか………。」
そういつてお茶を一気飲みする。でも顔の火照りはおさまらなかった。

「菊が……女………。」

またさっきのことを思い出す。さらに顔が火照る。

「もう、さっきのことは忘れるあるっ！！」

そう言つて気分転換に外へ出た。

「…ふう、…！！流れ星………！！」

柄にも無いけれど、お願いしてみるのも悪くないあるね。

そう思い、我は目を閉じ、手を合わせ、口を開いた………。

F e r i s i a n o v e r s i o n

「ヴェー！！今日も疲れたよ！………。」

ルートは恐いし、おやつは美味しくなかったし、沈黙が重かったし

………。

「……でも……、菊の笑顔が見られたから良かったかな」可愛かったしね」

女の子みたいだったなー！！男の時でこのくらい可愛いんだったら、女の子になったら相当可愛いだろうな！………。

そんなことを思いながら、さっきとはうって変わってるん気分
で窓を開けた。

「うわー、風が涼しいなー あー!!流れ星発見ー!!お願いしなきゃ
!!!」

そして、瞬時に思いついた願い事を、口に出した…………。

イヴァン・トリス・ライヴィス・エドアルド version

「今日も皆は面白かったなー」

ちよつと恐いことを口ずさみながら、家へと帰って来た。

「あ、イヴァンさん、お、遅かったですねーっ!!」

そう言つてトリスが出迎えてくれた。

あれ?おかしいなあ…………。いつもなら3人揃つて僕のこと出迎えるのに…………。

トリスも顔がほんのりと赤い。横を見ると、同じように顔を赤くしてもじもじしてるライヴィスとエドアルド。まあ、どうだっていいことだけどね

「あ、イ、イヴァンさんっ!!すみません、僕ぼーっとしてっ!!
」

「僕もです!!すみませんでした…………。」

ようやく僕が帰ってきたのに気付いたように、ライヴィスとエドアルドがまだ顔を赤くしたままそう言った。

僕は、

「うっん。別にいいんだよ?別に…………ね。」

と意味深な笑みを浮かべて言葉を返した。案の定、ライヴィスはびくびくぶるぶると震えている。まだ顔は赤いままだけどね。

ここで助け船を出したようにトリスが、

「そ、そうだ!!イヴァンさん、夕飯できてますよ、夕飯!!皆で
食べましょう?」

と言った。反対する理由もなかったし、僕は

「そうだね、僕もお腹すいちゃった。」

と返事をした。

「きよ、今日は久しぶりに外で食べませんかー……………」

まだ震えているライヴィスが、そう提案した。

「うん、いいんじゃないかな？外も晴れてて星が綺麗だしね。」

と僕は賛成した。するとライヴィスはほっとしたような顔になった。これだから面白いんだよね、ライヴィスはさ。

その後トリスが手際良く外にテーブルを出し、料理を並べていったのであつというまに夕飯の時間。あ、ウオッカもあるね。嬉しいな、なんていったって僕の燃料だからね！

皆が食べ始め、お腹も落ち着いたころ、僕は3人にずっと気になっていたことを聞いた。

「ねえ、トリスにライヴィスにエドアルド。君たち、どうしてさつき、顔が赤かったのー？」

僕がその質問をした時、ライヴィスはちょうどスープを口に含んだところで、ぶーっとなげ出ししまった。それを慌ててトリスが拭く。

「ねえ、どうして？ライヴィスが嘔き出しちゃうほど恥ずかしいことだったりしたの？」

僕はさらに追い打ちをかけるように言った。

「いや、それ……………は。」

動揺したようにトリス。顔が赤い。

「ええ、何もありませんよ？」

冷静を気取っているエドアルド。でも顔が赤いよ？

「なんでもないんです！！べ、別に菊さんの笑顔が可愛かったとか、そんなことを話してた訳じゃないんです！！」

顔を真っ赤にしたライヴィス。思いつきり言っちゃったね…………。やっぱり面白い。

「ライヴィス……………」

トリスとエドアルドの大合唱。でももう遅いよ。

「ふうん…………。うふふ、君たち、そんなこと考えてたんだあ」

「そんなことって……！！だ、だってイヴァンさん、可愛いとは思わなかったんですかっ!?」

更に真っ赤になったライヴィスが、僕にそう問いかけてきた。

「そ、そうですよ、イヴァンさん！イヴァンさんだってあの時、菊さんの顔見て赤くなつてたじゃないですかっ!」

「女の子みたいで可愛いって、思つてたのではないのですか?」

追い討ちをかけるようにトリスとエドアルド。とたんに僕の頬も紅潮し始める。

「そ、それは……。まあ、可愛かつたんじゃない、かな……。?」
言つてゐる途中に自分で自分の頬が赤くなつてくるのが解つた。

「あ、イヴァンさん、顔赤いですよー?」

「あ、本当だ。」

「確かに、僕らに負けず劣らず真っ赤です……。」
そう3人に言われた。

『君たちも真っ赤じゃないのかなあー?僕より酷いよ、きっと』

普段ならそう言葉を返せるんだろうけど、今の僕にはそんな余裕が無かつたんだよ、生憎ね。

逃げ場がないな……。そう思つて、僕は空を見上げた。ふと横を見れば、3人も同じような心境だったのだろう。僕と同じように空を見上げていた。とても自慢できるようなことじゃないけど、皆赤い顔をしてね

僕のこの顔の赤さはどういうものからくるもののかな?ふふふ、勿論僕には答えが解つているよ?自分のことだしね。……これは、あの笑顔の可愛らしさに……。不意ながら見とれてしまった……。……ということ、そして、同じ男同士だというのにそんなことを思つてしまった恥じらいの気持ち……。かな?

……。どうして、だらうね。どうして菊君は男なのかな?菊君が女の子だったら、こんな風に思わなくなつて良かったのに……。……。菊君が女の子だったら、僕の恋人として傍におけたかもしれないな

いのに……………。

……………なーんてね あ、これは冗談じゃないよ？結構本気。きつと皆もこんな風に思ってるんじゃないかなあ……………。

「あ、流れ星……………！！」

僕と同じように、空を見上げていたトリスが指をさして言った。瞬時に僕とほかの2人はその指が示した方を見る。

流れ星といえば、お願い事がつきもの、だよな。僕の願いは物理的には叶わない。だから、少しくらい神様を信じても……………神様に頼つても……………いい、よね？

ほら、隣の3人だつてきつと同じこと考えてるよ。僕も早くお願いしなきゃ。僕は隣の3人にならつて、同じように両手を合わせ、心の中で願い事を強く念じた……………。

アントーニョ version

「ふーう、今日も疲れたでー！！」

そう言つて俺は帰宅した。しかし、今日はホンマに疲れたで……………。特にあの沈黙……………！！

ああ、あかんあかん。これ禁句やな！だけど、一度あの沈黙を思い出せば、同時にあの時の菊の笑顔が鮮明に蘇る。

「笑つたら……………可愛いねんな……………。女の子みたいな……………。あのまま持つて帰りたいような……………！！」

ああ、あかんつて、ホンマに！！何べんも言うけど、相手は男やで！？

……………でも……………あれで女やつたら……………言うことなし、やな。また顔が赤くなってくる。

「よ、よし！！気分転換に散歩でも行こかー」

無理やりながらもテンションをあげて外へ出た。

出たのはいいが、行くあてがない。

「もー、しゃーないから星でも見てよか……………」

見始めたのはいいが、やはり1人だと沈黙が重い。……………沈黙っ！？
ああ、嫌や！！さっきもう忘れたと思ったのに……………っ！！

また菊の笑顔がフラッシュバック。また顔が赤くなる。もう、だから男っ！！相手男っ！！

男好きなんてあかん！！俺はいいけど……………いやホンマは良くないけど、まわりの目えとか敵しいし、あかん！！もう、菊が女やったらこんな思いせんすんだのに……………っ！！

俺もうイカれてしもたんやろか……………。

そう落ち込み始めた時だった。

「あつ！！流れ星！！はよお願いせな！！」

この落ち込みを何とかしたい一心で願いをひとつに絞る。

こんなに落ち込んでる原因、そう、菊。いや、正確には菊が男であること。だったら、お願いは決まった。

ニカツと笑って、俺は願い事を呟いた……………。

皆はこんな風に考えていた。勿論、此处で紹介した輩以外も皆ほぼ同じことを考えていた。そしてそこに、運良く多くの流れ星が通りかかった……………。

皆の願い、そう。それは、

“ 菊が女になりますように……………。 ”

皆が皆、同じ時間に同じことを願った。だとすれば、願いが叶えられる確率は、何十倍にもなるんじゃないかな？

この皆の願い、果たして神に届いたのだろうか……………？

届いたか届いていなかったかは、もう直ぐにでも嫌でも解る。

さあ、皆の願いに神の御加護を……！！なんてね

星に願いを…………… (後書き)

さあてさて、菊はどうなっちゃうのかなー？ (もう答え言ってる
ようなもんですが↑

とにかく、次話をお楽しみに

朝、お目覚めの時間（前書き）

3話はいろんな人目線だったけど、4話は菊視点に戻りました！！

それでは、第4話をお楽しみください♪

朝、お目覚めの時間

ふすまの隙間から、朝日がもれてくる。

とても眩しい……。

「今日もいい朝ですねー。いい気持ちです……。ん？えー、あー
ー。……？」

言葉を発した時、私は自分の声がいつもより大分高いように感じました。のどでも腫れているのでしょうか？私、いつも至って健康なんですけど……。これが年というもののなのでしょうかね……？？多少の疑問を残したまま、私は立ち上がった……。はずだった。はず“だった”、というのは私は実際には立てなかったから。自分の浴衣の裾を踏んで思いつきり転び、ずさーっと少し遠くにある鏡の前までずり進んできたのだ。

「痛あつ！もうなんなんですかねえ、今日は！！のどの調子は悪いわ、踏むはずの無い浴衣の裾を踏んでぶっ転ぶわ……。もう最悪ですっ！」

続く不幸に対し、珍しくぶんぶん怒りながら顔を上げた。ここまで良かったんです……。

「……………」

絶句。だって鏡に映っていたのは私じゃないんです。日本人の可愛らしい出で立ちの女の子……。雪のように白い肌と対照的で非常に目立つ肩までの漆黒の髪。前髪は揃っていて、俗に言うぱつぱつという奴だろう。吸い込まれそうな瞳に、それを縁取る長いまつげ。

頬はほんのり赤くなっている。身長も前より低くなり、華奢な体系……。私……。じゃないですよ、絶対！と、というか私、

こんな子見たこと無いし……っ！！

おそろおそろ自分の髪をさわってみる。……やはり長い。私の動きに合わせて、鏡の中の少女も同じ動きをする……。やはりこの鏡に映っている少女は私の姿なんですかつ！？

こんなことなど信じられないっ！！こんなことある訳ない！そう、あり得ない！！

念の為自分の体全体を触り、確かめてみた。

……ああ、この体は完全に女性のもの、です、ね……………。

顔が変わっただけ（勿論それだけでも大問題なのだが、）で性別は変わっていなかった、なんていう微かな希望が完全に砕け散り、…絶望……という文字が脳裏をよぎりました。

正直、いや当然ながら、私は焦っています！！そしてまあ当たり前ですね。こんな状況でいつも通り過ごすことはまず無理でしょうから！！
と、取り合えず状況整理を……。

朝、目覚めた

←
思いっきり女性になってた。

だ、駄目だ……！データが少なすぎます…っ！！ど、どうすれば……！？

あっ……………！！というか今日は昨日に続き、世界会議の日……っ！！

こ、この姿で出席する訳には……………！

で、でも会議には出ないと……………！

ああ、もうっ！！本当に、どうすれば！？

……そうだ……！！要は私が本田菊だということを黙っていればいいんです！

えーと私は妹だということにして……、代理で来ました♪などと言っておけば大丈夫……のはずっ！

「……………あ。」

勇み足でさっそく会議に向かおうとした時、自分の服装に気付く。
私ってば、男性の時に着ていた浴衣をそのまま着ていこうとしてた

……！ぶかぶかだし、男用だし……

「確か、このへんに、あった、はず、なんだけ……！！あった！」

そう言いながら私は薄桃色に花柄という何とも女性らしい着物を探し当てました。

確か前に、間違えて買ってしまったんですね……。

……仕方無い……。着ていくしかないですね……！！

何か無駄な決意とともに私はその着物を着て、家を出ました……。

朝、お目覚めの時間（後書き）

えーと、次回の作品はー……………。

まだ考えて無いので、明日学校の授業中に考えておきます（汗

更新明後日になるかしんない……………。

ごめんなさいっ（泣

ドアの向こうへ…… (前書き)

えーと特に忠告などはありません♪

楽しんでいただけたらなあ……と思います

ドアの向こうへ……

用心深くなり、着物の帯の部分に日本刀を差しておきました……。
だって、性別が反転するという本当に、本当に有り得ないことが起きてるんですよ！？

宇宙人が奇襲攻撃をかけてきてもおかしくないじゃないですか……

……。

ああ、なんて恐ろしい……。仏様……。これは天罰なのですか……？
私は何か、悪いことをしたのでしょうか……？

「……考えても仕方ないですよね……。」

はあ……。と少し大きめの溜め息をつく。

それにしても私、かなり落ち着いていませんか？ 勿論多少は取り乱しはしましたが、もう今はこうして会議に向かっている……。

私は会議がそれほど大切なんでしょうか……？

……解りません……。あ、自分で自分に問いかけておいてそれはないだろ！？ というつつこみはこの際無しでお願いしますね？

なんだかんだ言っている間に……。着いて……。しまいましたね……。とても緊張します……。……果たしてこの姿でも、私だと気付く人はいるのでしょうか……？

いや、気付かれては困りますね……。何と説明すればいいのか解りません……。

朝起きたら女性になってたんです。なんて、いくら事実であるとはいえ誰も信じませんよ……。

そうして私は……。複雑な思いのまま……。会議室のドアを……。開けました……。

実をいうと、菊はこの会議に遅れていた。やはり焦っており、平常

心が保てずに時間感覚が狂ってしまったのだ……。
それでは、菊が来るまでの会議の様子をお見せしよう……。

「H A H A H A 皆、遅れてすまないねー！でもまあ、いつの時代だつて真のヒーローは遅れてくるっていうし、いいよなっ？」

そう笑顔で周りに問いかけるアルフレッド。

しかし、周りからは何の声も帰ってこない。

「おや、なんだい？僕のヒーローに対する意見に賛成の人はいないのか？いつも1人くらいは、僕の意見に賛成してくれる人が居るのになあ……。菊とか菊とか菊とかさー」おい、菊、どこに居るんだい？」

と続け様に言葉を投げかける。

「おいアル！菊ならまだ来てねえよー！」

と、ここでもやつと言葉を返すアーサー。何故だかどこか不機嫌そうな顔で、だけれど。

「そうだねえ……。何かあったのかな……。？ああ、お兄さん心配だよ……。」

と続いてフランススも。こちらは少し心配そうな表情で。

すると2人について皆がガヤガヤと騒ぎ始めた……。昨日あんな願い事をしただけに、（詳しくは第三話です！！）皆菊のことだと黙っていられない様子で……。

そして、何故かアーサーとフランススが口喧嘩から取っ組み合いの喧嘩へと発展しそうになったその瞬間……

ドアが小さく開いた……。

勿論のこと、皆の視線はドアへと集中した……。

「うわっ……！！！」

そう小声で呟いた。

私はドアを開けたのはいいけれど、あまりにも私の開けたドアに皆さんの視線が集中していて驚き、ドアのぶから手を離してしまったんです。勿論、ドアは“ぱたん”……と音を立てて閉まった。

み、皆さん、私が遅れたことに対してもの凄く怒っているから、視線で私に怒りを伝えよう、という作戦なのでしょうか……！？

でも仕方ないですよ……。朝起きたら女性になってたんですもん。あ、おっと。これは秘密、でしたね……。

今度は決心して、ドアのぶに手をかけた……。そして……まだ皆の視線が残ったドアを開け……。私は会議室の中に入った……。

ドアの向こうへ…… (後書き)

今回相当眠い時にPCにうちこんだので、誤字脱字があるかもれません……。

もしあれば、感想のところに書き込みください!!

可愛いと思っただもん (前書き)

あはは、打つの疲れちゃいそうだなー。

可愛いと思っただもん

ドアが開いた時、皆真剣な顔で其方のほうを見つめた。
しかし……………」

ぱたん……………」

「し、閉まった……………」

そう、何故だがドアは閉まってしまったのだ。

「どうしてだい？菊が来たんじゃないのか……………」

と唇を尖らせてアルフレッド。

「おいおい、お前は餓鬼かよ。んな顔してんじゃないよ。」

とアルに突っかかるアーサー。

「馬鹿だなあ、君は。今心配すべきは菊のことじゃないのか？」

と困ったように言うフランス。珍しく正論だ。

「そうだよー！フランス兄ちゃんの言うとおり！！今は菊のことが一番だよー！！」

むっと少し怒ったようにフランスに加勢し、アーサーにそう言うフェリシアーノ。

「お、おい！！そんなに責めんなって……………。悪かったよ。」

皆に問い詰められ少し焦ったのか、アーサーが謝った。

「おい！お前ら！！そんな下らん理由で喧嘩している場合ではないのではないか！？菊が心配なら今直ぐにでもドアを開けて菊を中に連れて……………」

ルートヴィツヒが言葉を止め、視線をドアの方へとやった。
ドアが開いた。

「……………」

絶句。皆揃いに揃って絶句。

だって、ドアを開けて入ってきたのは……

皆が菊が女の子になったらこんな風になるであろうと思い描いた……

……

その姿そのものだった。

『か、可愛い………!!』

誰もがそう思った。老若男女問わずとも。でも少し考えれば疑問にぶつかる。

こんなこと、有り得るか……？、と。

しかし、其処まで皆思考が追いつかなかったらしく、誰もそのようなことは口にしなかった。それほど愛らしい姿をしていたのであるう。

いち早く口を開いたのはアントーニヨであった。

「菊？菊なん？菊？本田菊？君は菊なんか……？」

と、ぼーとした表情で少女に問いかけた……。

私が入った瞬間、皆さんがしーんと静まり返りました。

正直、恐いですよ？

皆が私をじつと見ています……。

すると、アントーニヨさんが問いかけてきました。

「菊？菊なん？菊？本田菊？君は菊なんか……？」

と。

なので、私は用意しておいた言葉で返事をしようと思います。私は

本田菊の妹です、とね。

「私は本田き」

「やっぱ菊やったん！？俺の思い浮かべてた菊の女姿そのものやも

ん!!めっちゃ可愛いなあ……!!」

私が言い終える前にアントーニヨさんが子どものように顔を輝かせてそう言いました。

これは……私が本田菊本人であるということを信じ込んでいますね……。まあ、信じ込むも何も本当のことなんですけど!

というかアントーニヨさん、何故私の女姿を想像するんですかつ!? そんなことを考えていると、次の瞬間アントーニヨさんが

「よっしゃーっ!!神は俺の願いを見捨てへんかったでー!!」
と元気良く大声で叫びました。

………は?“俺の願い”………?

私がアントーニヨさんの言葉に相当の疑問を感じていると、

「ちょ、何ー?お前、菊が女になれば良いのにとか願ったん!?……俺もだけどー……。」

とフェリクスさん。むっ!?

「そうですよ、アントーニヨさん!!そんなこと……!!てかフェリクスも願っちゃったの!?……やっぱり俺もだけど……。」

とトリスさん。むむっ!?

「お、お前ら、菊が女になればいいのにとか願ってたのか!?お、俺は願ってないからな!!絶対、だから、な!!」

……んな棒読みでしかも顔真っ赤にして、自分はやってないとよく言えますね、アーサーさん。私はだんだんイラついてきましたよ? 此処からはもう皆自主告発のオンパレード。何願ってくれちゃってるんですか………?

「うふふ、昨日は流れ星が多かったみたいだねー 僕のところにも流れてきたよ。僕も皆と同じ願いをしたな♪でも、皆同じ願いするってすごいよねー!!だからこうして菊君が……今は菊ちゃんだけで、女の子になったんだよね!僕は嬉しいよ?」

とイヴァンさん。むむむむむむっ!?貴方まで……!!というか、そんな純粹無垢な笑み浮かべても無駄ですよっ!!私は騙されませんっ!!

「というか……。何故皆さん揃いに揃って私を女にしたかったんですか……。」

と若干……いやかなりイラつきながら言った私。

普段とは違うオーラをまとった私に、皆さんは少し戸惑っている。しかし、そんな場の空気を読まない人も、中には居た。……いや、結構居た。

そのうちの1人、フェリシアーノ君がこう言った。

「だってー、菊が女の子になったら可愛いと思ったんだもん……！」と。

可愛いと思ったんだもん (後書き)

KYなフェリシアーノ君ですねw
次の話をお楽しみにー

現れし黒菊（前書き）

うーん……。私なんかいつも、打ちながら文章考えていくんだけど、
変えたほうがいいのか……。？？（知るか！！）

現れし黒菊

「だってー、菊が女の子になったら可愛いと思っただもん!!」
そのフェリシアーノ君の言葉に、私はもうふっきれた。

「可愛い、と思ったから……………」

「うん、そうだよー！それに今、こんなに可愛いもん！！俺より大分ちっちゃーい!!」

フェリシアーノ君はまた空気を読まない発言をし、その上私にハグをしようと近づいてきた。

ルートさんが、フェリシアーノ君を黙らせようと小声で注意しているのが解る。でももう遅い。

「フェリシアーノ君の……、いえ、皆さんの想像を補うために私は女にされてしまったと？そのために私には今までの平穏な生活を奪われたと？そうなんですかつ！？そうなんですねっ！？」

激しい剣幕で一氣に捲し立てる。そして私はイヴァンさんも真っ青のどす黒いオーラを身にまとっていた。

皆はそのオーラにたじろぐ。

「き、菊！！落ちっ……………っ！」

アーサーさんが私を嗜めようとする。でもその言葉も途中で切れる。何故なら私が帯に差しておいた日本刀を取り出し鞘から抜き、アーサーさんに向かって構えたから。

愛用している日本刀がギラツと不敵に光る。

「ひっ……………」

アーサーさんが腰を抜かす。周りの方たちはただ呆然とその様子を見ていますね。でも気にしません。

私は刀を相手の鼻面へと突き付けました。ただひたすら無言で。

「——っ!？」

いきなり背中からがっちりと抑えられた。振り向くとルートさん。

「あー、取り合えず落ち着いてくれんか？」

と少し控え目に言ってきました。私は無言で睨む。

「……………あっ！！」

私がルートさんと睨みあいをしている隙に、イヴァンさんが私の日本刀をあっさり取り上げました。

どうやら女性になって、少し力も弱くなってしまったようです……。下に目をやると、地面にへたり込んだままのアーサーさん。どうやら恐怖でまだ立てないらしく、アントーニョさんに肩を貸してもらって立ち上がりました。

「…………イヴァンさん、返してもらえます？」

じつとイヴァンさんを見つめてそう言った。黒いオーラを出して。

「で、でも、菊ちゃ…………菊君、これ返したらまた暴れるでしょ？」

今菊ちゃんって言いかけましたよね…………？というか、あのイヴァンさんが少し恐がっているように見えますよ……

？？そんなに今の私は恐いんでしょうかねー？

「当たり前ですよ。」

私はニコツと笑ってイヴァンさんに言葉を返しました。ただ、目だけは笑っていない笑顔で、ですが。

「さ、返して下さい？」

イヴァンさんがピクツと動き、此方に向かってきました。返してくれるようです。

…………そう油断したのがいけなかったんでしょうかね…………。

背後からこつそりと近づいてきた王さんに、みぞおちを一発やられちゃいました…………。

「菊、すまないある…………。」

そんな王さんの謝罪を聞きながら、私の意識はだんだんと……遠のいて…………いった……。

現れし黒菊（後書き）

イヴァン恐がるのって、菊ナタちゃんかよw

ていうか今回の話は、恐がるイヴァンを書きたかっただけなんだ…

…！！

ただ、それだけなんd（ryノ黙りなさい、このお馬鹿さんがっ！！

目が覚めて… (前書き)

ね、眠い…!!
眠いんだぞ!!

目が覚めて…

突然、ぱちつと目が覚めた。

「うわっ!？」

起きていきなり叫んでしまいました……。でも、無理もないですよ！だって目を開けた私が見たのは、私の顔を覗き込む皆さんの顔。そりゃ吃驚しますよ……。

少し気持ちを落ち着かせ、ここはどこかと周りを見回せば、何と会議場の、いわば保健室的なところでした。

「ヴえ！菊起きたー!!大丈夫？気分はどおー??」

「いえ、気分は特にどうってことありませんが……。私、どうしてここに……?」

それが一番の疑問です。

む、と眉間に皺を寄せて理由を考えていると、

「覚えていないのですか？このお馬鹿さんが！あなたは王さんにみぞおちを一発殴られて気絶したのですよ?」

とローデリヒさんが教えて下さいました。

でも、お馬鹿さんはないでしょう?

まあそれはさておき……。……そっか。私、気を失ったんでしたね……。

すると王さんが、

「菊うーっ！すまんある!!我の大事な妹に手を出してしまって……

……我は……我は……!!」

と若干涙目になりながら私の手を取り、話しかけてきました。というか妹とか女性を連想させる言葉を発するのはやめて下さい。そして手を離して下さい。

するとその王さんの言葉にアーサーさんが、

「まあ、あの時はそうするしかなかったんじゃないか?てかお前、

手え離せ！」

と言いました。すると、しゅしゅといった様子で王さんが私の手を離しました。

全く、昔から王さんは過保護なんですから……………。

というか、“あの時”…………？私は不思議に思っアアアアさんの顔を見ました。

その頬には大きめの絆創膏が貼られていました。

その絆創膏はどうされたのですか？と私が尋ねようとした時、

突然。本当に突然、記憶がフラッシュバックしてきました。

“あの時”私は…………ルートさんを睨み、イヴァンさんを笑顔で脅し、アアアさんの目の前に日本刀を…………！何てことでしょう！？一生の不覚ですっ！

私は直ぐに周りを見渡し、ルートさん、イヴァンさん、アアアさんを探した。

偶然にも、3人は横に並んでおられました。

「ルートさん、イヴァンさん、アアアさん……………」

此処で言葉を切り、顔を上げ、3人を見つめる。

3人はその言葉に应じて私のほうを見降ろしました。

「本当にすみませんでした…………っ！！」

私はベッドの上に正座して謝った。

「特にアアアさんっ！！顔に傷までつくってしまっ…………！！」

私はアアアさんを見上げた。

そして相手の頬に手を添え、顔を近づけていった…………んですが、それを邪魔するように

「ちょ、菊！？何しようとしてんだよっ！！」

と真っ赤になったアアアさんが私にそう言いました。

「何しよう、とは…………？」

私は彼が真っ赤になっている意味が解らず、首を傾げてそう言った。するとイヴァンさんが、

「え？菊ちゃん、アアア君にキスしようとしたんじゃないのー？

僕、アーサー君だけ随分待遇いいんだなあ……、羨ましいなあ……、
って思って……………」

ここで一旦言葉を切り、あの黒いオーラを出して、
「…アーサー君のこと呪おうと準備してたんだけどな……………」

と仰いました。こ、恐いですよ……………？ていうか、貴方もちゃんとか
女性を連想させるような言い方は止めて下さいっ！

じゃなくてそれよりもっ！！

「どうして私がアーサーさんにキスをしなきゃいけないんですかつ
！？」

「いや、だって……………。あの感じからいくと普通キスでしょ……………？だつ
たら何としても阻止しないと……………って思ってお兄さん、アーサー
とつちめるためにそっちに駆け付けようとしてたところなんだよ……………」

「としれっと言うフランスさん。」

「そうさ！アーサーなんかの良い思いをさせないんだぞ！！大事な
ヒロインの菊をアーサーに奪われて、黙ってる訳にはいかないさ！
つまり、俺がヒーローだ！」

と意味不明なことを自信満々に言うアルフレッドさん。

周りを見れば、その他の人たちも今にもアーサーさんに向かって駆
け出しそうな格好です……………。

はあ……………。どうして私の周りは一筋縄ではいかない人が多いのでし
ょうか……………。

「私がアーサーさんのお顔の傷の様子を見ようとしただけです！だ
いたい、男同士でそんなことする訳ないでしょう！？」

私は少し怒って言いました。
でも、

「いや、でも菊ちゃん少なくとも今女の子やん？」

と爽やかスマイルでさらっとアントーニヨさんに返されちゃいまし
た……………。

…ああ……………。そう、でしたね……………。

出来れば目が覚めて、なんだ、夢オチかー」といった感じを求めていたんですけどね……。

目が覚めて… (後書き)

変な終わり方ですみませんっ!!

でも眠いんです! 眠すぎるんです……っ!!

大目に見てやって下さい!!

で、いきなりですが、ただいま小説のネタを募集しております。つ

まりはリクエストですねゝww

▼一言のところに書いていただければ、たいていのリクエストはお書きいたしますのでb

では、次話をお楽しみにー

切腹ッ！？（前書き）

眠いんだぜ……。

切腹ッ！？

いや、じゃなくて！！馬鹿げたことを考えるよりもアーサーさんの傷を心配する方が先ですっ！！

「ちよつと見せて下さいね…。」

そう言つて私は再びアーサーさんに向き直り、（他の方々はまた見詰め合っている、と不満げな声を漏らしていましたが）その絆創膏をはがしました。またアーサーさんの顔が赤くなっていますが、そんなにこの部屋は暑いですかね？

はがし終わり、見てみると、そこには確かに傷がありました……。思つたより浅かつたようです…。とりあえずは安心ですかね…。

でも、深い傷であろうが浅い傷であろうが五十歩百歩です。相手に傷を負わせたことには変わりないのでから……。一気に自責の念が押し寄せてきました。

「本当に……すみませんでした、アーサーさん！謝つてどうにかなることじゃないとは思いますが、とにかくすみませんでしたっ！！」

私はもう一度正座しなおし、アーサーさんにひたすら謝りました。今、私の顔はおそらく血の気が失せているでしょうが、そんなことも気にしてられません。

当のアーサーさんは私の弁解に少し驚いた様子で、困つたような顔で、

「い、いや、それはお前だつて可愛いとか言われてイラついてただろうし、別に俺だつてそんな怒つてねえし、第一、傷浅かつたし……。」

「浅かろうが深かろうが傷を負わせたことに変わりありませんっ！ああ、すみませんすみませんすみません……。」「謝り続ける私の姿をどうとつたのか、

「アーサー！！菊にいつまでも謝らせてんじゃねえぞこの野郎ーっ

「！！」

とロヴィーノさん。というか、私の呼び方大幅に変わってません！？

「兄ちゃんの言う通りだよーっ！！そんなに謝らせちゃ菊が可哀そうだよーっ！！」

と珍しくキツとアーサーさんを見据えてフェリシアーノ君。

この御兄弟は何を勘違いされたのでしょうか……………。

今の感じ、悪いのは圧倒的に私でしょう！？

しかし、そんな私の気をよそに、皆さんが挙ってアーサーさんを責め始めました…。

ああ、また私のせいでアーサーさんが……………！！

もうどう謝ればいいのやら……………！！

……………あ。ありました…………… 本当の最後の手が……………。それは……………

「ああ、もうとにかくすみませんでした……………！！」

そう言って私はいつの間にか帯に戻っていた日本刀を取り出した。

そう、最後の手とは切腹。

刀を鞘から抜き始めると、

「やめて、菊ちゃんーっ！！菊ちゃん、ホンマやめてえーっ！！それはあかん！それはあかんてー！！」

と顔を真っ青にしたアントーニヨさん。

「菊、やめろっ！お前に死なれちゃかなわん！！」
と珍しくかなりうるたえたルートさん。

「うおっ！？菊、お前責任感じすぎだっ！！大丈夫だって言ってるだろっ！？駄目だあっ！！」

と相当驚いたようにアーサーさん。

「いやあーっ！！やめて！やめて菊ちゃんっ！！早まらないでえーっ！！」

とヒステリックな声でエリザさん。

などと私を止めるべく人々が叫び始めました。当たり前ですよ。目の前で人が死のうとしているのを止めない人はいないでしょう。

ら。

でも、日本男児たるもの——あ、体は女性ものでしたね。——
度決めたことを今更やめることなどできません。

第一、女性になった時点で相当なショックを受けてましたし。その
上迷惑を皆さんに掛けまくって……。

目を瞑って刀を腹に持っていこうとした時……。

刀が取り上げられた。

「へ……………」

刀を体の支えにしていた私は、その瞬間バランスを失ってベッドか
ら落ちた——否、正確には落ちかけた。

何故って、私を抱き上げた人が居たから。

切腹ッ！？（後書き）

うん、意味解らない！

途中から自分でなに書いてるか解なくなっちゃったよー（な
っちゃったよー じゃねえよっ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8587j/>

本田菊と申します。

2010年10月9日12時13分発行